



神明神社

祭神

高皇産靈神
天照皇大神

宮司・加茂宮司

館山市笠名四七番地



平成の大改修を終えた
笠名神明神社



旧神明神社 神社額

昔の笠名神明神社

由緒

文献によると笠名の神明神社は平安時代の末期の嘉保年間(一〇九四年〜一〇九五年)に、当時の安房の國の國司であった源親元公の伊勢神宮遥拝所として創建されたと伝えられています。以来笠名地区の氏神様としておおよそ九百年の長きにわたり地区民の心の拠り所として存立してきました。明治の社格制度により村社に列格し現在に至っています。

近代では大正六年三月に改築された後、風雨により本殿の傷みもひどくなり、平成二十五年より大改修に向けて地区内一体となり動き出し、平成二十七年十月に改修を完了しました。その後地区の竣工奉告祭を行い、さらに平成二十八年五月には館山地区の仲間とともに百年に一度と言われる祝賀会を盛大に執り行うことができました。



百年に一度と言われた竣工祝賀祭

自慢の祭

毎年八月一日二日に、十三地区八社の合同祭礼として催行される「館山のまつり」。笠名区では区が主催となり、青年会、明栄会を中心に準備が進められ、子ども達にも伝統の「木遣り唄」の稽古をつけます。
神輿渡御の道沿いには、縄が張られ幣束を垂らすのは、「氏子の絆」を繋ぐと言う意味合いもあり、華になる拵えです。



館山神社拜殿前につけた笠名神輿



神輿を豪快に「空高く」投げ上げる



昭和20年代の笠名の輿丁たち

一日目は大殿が、二日目は中殿が区内を渡御します。「きれいな担ぎ」が自慢の笠名の神輿は、「七、七、七、五」の何とも言えない味わいの有る節回しの木遣り唄、笛が鳴ると唄が始まり、場の雰囲気、「めでためだのこの杯は、鶴が杓子で亀が飲む」など、三曲ないし五曲唄ってから担ぎ出されます。昔は若い衆が顔に白粉などの化粧をして担いだり、子ども達が踊ったりして、地区一体となって多いに楽しんでさうです。
神輿出御を告げる法螺貝の音が響き渡ると「ホイキタ、シヨイ」「ヨーイ、ヨイ」の掛け声と共に、神明鳥居をくぐり神輿渡御が始ります。神輿を差したまま「いっちゃ節」を唄ったりして道中渡御し、囃子唄を唄った後、最高の見せ場でもある、四尺近い大神輿を豪快に「空高く」投げ上げる、息の合った華麗な技を披露する笠名神輿の見所です。

祭りの起源 大正三年、旧館山町(現在の青柳、上真倉、新井、下町、仲町、上町、楠見、上須賀地区)と、旧豊津村(現在の沼、柏崎、宮城、笠名、大賀地区)が合併し館山町になったのをきっかけに、大正七年より毎年十三地区十一社が八月一日二日の祭礼を合同で執り行うようになりました。その後、大正十二年の関東大震災により、諏訪神社(下社)、諏訪神社(上社)、厳島神社、八坂神社の四社が倒壊したため、協議により各社の合祀を決め、昭和七年に館山神社として創建されました。
現在は館山十三地区八社として、神輿七基、曳舟二基、山車四基がそれぞれの地区から出祭しています。愛称「たてやまなまち」として、城下の人々によって伝え続けられてきた「心のまつり」です。

8/12 館山のまつり



館山神社境内に勢揃いした神輿

このパンフレットは、地域の方々からの聞き取りを中心に、さまざまな文献・史料からの情報を加えて編集しています。内容等につきましてご指摘やご意見等ございましたら、ぜひご連絡いただき、ご教示賜りたくお願いいたします。